

韓国の七奪を論破②

日 韓 の 眞 実

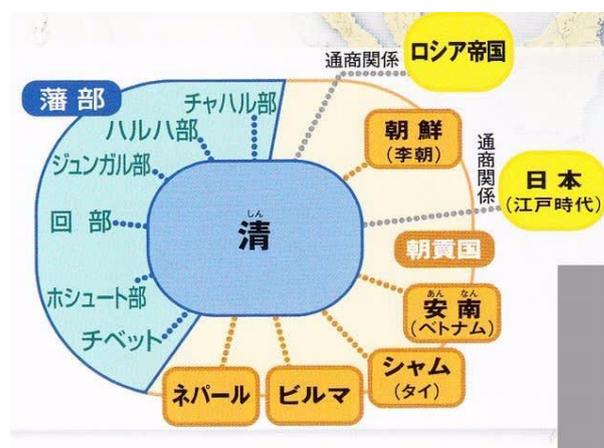
(2) 「主権を奪った」への反論

前回は「国王を奪った」への反論をおこなった。李王家を廃止したのは韓国自身であることを証明した。次は「主権を奪った」への反論であるが、そもそも半島に主権があったのであろうか？ 答えは否である。

李氏朝鮮は明の属国であり、後には「清」の属国であった。高麗軍の指揮官李成桂が明に寝返って高麗王朝を倒した後、1393年明の皇帝より「権知朝鮮国事」（実質的朝鮮王）に認定され、明の冊封（さくほう）体制に組み込まれた。国号も「和寧」と「朝鮮」から明の皇帝に選んでもらっている。自ら国名も選べない情けない国である。自らは「朝が静かな国」の意味であったが、明からは貢物（朝）が少ない（鮮）国という意味で選んだと言われている。資料によれば、清の時代には琉球の使臣は駕籠に乗って宮廷に入る入ることを許されたが朝鮮は許されず、中国の属邦の中でも下位に甘んじていた。

注) 冊封体制

中国歴代王朝が東アジア諸国の国際秩序を維持するために用いた対外政策。中国の皇帝が朝貢をしてきた周辺諸国の君主に爵位を与えて君臣関係を結んでその統治を認める（冊封）一方、宗主国対藩属国という従属的關係におくこと。



清朝の冊封体制

1637年には清の軍門に下り、清との間で和約を結んだが、次の様なものであった。

- (一) 朝鮮は清に対し臣としての礼を尽くすこと。
- (二) 朝鮮は明の元号を廃し、明との交通を禁じ、明から送られた誥命（こうめい）＝（勅命と冊印）と明から与えられた「印璽（いんじ）」を清に引き渡すこと。
- (三) 王の長子と次男及び大臣の子女を人質として送ること。
- (四) 清が明を征伐する時には、求められた期日までに遅滞なく援軍を派遣すること。
- (五) 内外（清）の諸臣と婚姻を結び、誼（よしみ）を固くすること。
- (六) 城郭の増築や修理については、清の許諾を受けること。
- (七) 清に対して、毎年黄金百両・白銀一千両と二十余種の物品を歳幣（さいへい）＝毎年納める金と物品）として上納すること。
- (八) 皇帝の誕生日である聖節、聖朔（せいさく）である正月一日、冬至（とうじ）と慶事の使臣は明との旧例に従って送ること。

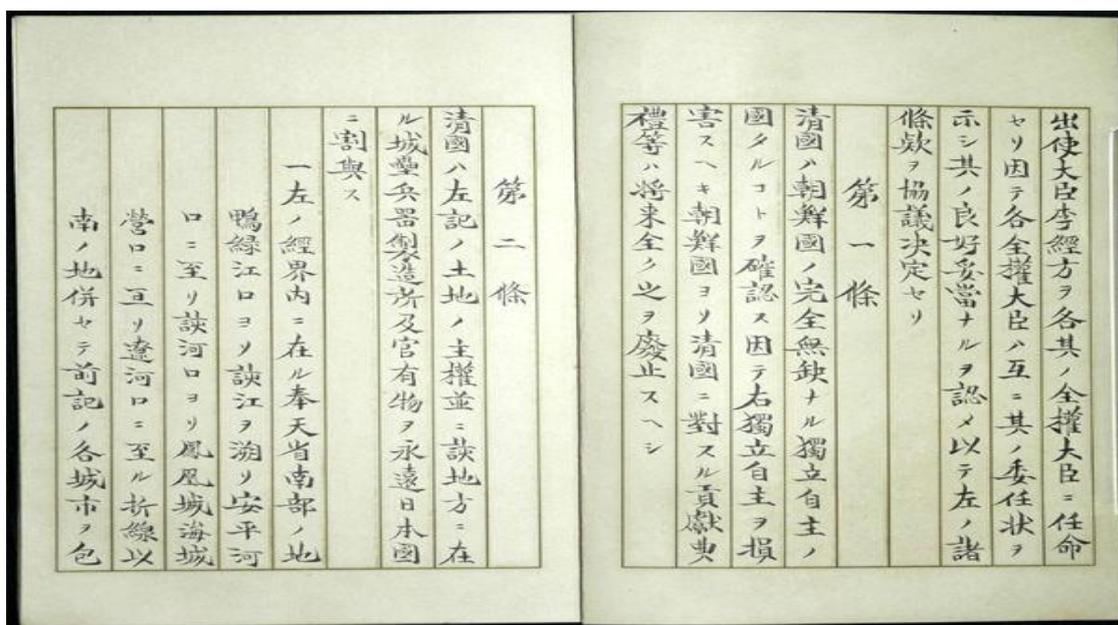
尚、(七)の二十余種の物品のナカミは、牛三千頭・馬三千匹・各地の美女三千人が含まれる。これで主権があったと主張出来るのであろうか？

この朝鮮を清から独立させたのが日本であり、日本は朝鮮独立の為に日清戦争を戦ったのである。19世紀後半は欧米列強のアジア侵略が進み、清は欧米諸国の半植民地と化し、次は朝鮮、そして日本の番である。朝鮮は一刻も早く清から独立して、日本と共同して列強の侵略を防ごうと望んだのであった。1894年朝鮮を属国として支配下に置こうとする清と朝鮮の近代化を願う日本が、朝鮮の独立、即ち主権回復を巡って衝突したのが日清戦争であった。日本は清に勝利し、下関条約が結ばれた。そもそも講和条約の第一条は戦勝国側の戦争目的達成内容が謳われるのが通例である。



下関講和会議の様子

その一条は「清国は朝鮮国の完全無缺（むけつ）なる独立自主の国たることを確認する。因って右、独立自主を損害すべき朝鮮国より、清国に対する貢献（こうけん）、典礼等は将来全くこれを廃止すべし」...とある。これは日本の戦争目的が朝鮮独立であったことが明確になっている。この条約の締結によって、朝鮮の独立は立派に達成された。しかしながら、朝鮮は民族的欠点である事大主義の悪癖によって、自ら主権を捨てる方向に走り続けるのである。清が朝鮮南部から撤退した時点で、日本がバックアップしていた改革派の「金弘集」が政権につき、近代化の為に身分制度の廃止、貨幣制度改革等、あらゆる分野に渡って近代化の土台を作る為に奮闘した。これを「甲午改革」という。これが成功していれば、日露戦争もなかったし、その後の朝鮮の歴史は変わっていたはずであった。それを遮った原因は戦うことを「怯」としない事大主義であった。



下関条約後、大きな犠牲の上に国際法上正当な交渉で得た遼東半島を「首謀者のロシア」とドイツ・フランスの軍事大国の理不尽な「三国干渉」の要求によって放棄せざるを得なくなった。その途端、甲午改革によって国王の専制的権力が減少しつつあった国王の「高宗」とその妃である「閔妃（びんぴ又はみんぴ）」は、「日本は弱い」と見るやロシア公使ウーベルと謀って改革政府の妨害を重ね、1895年半ばついに金弘集は失脚、結果改革は水泡に帰し、高宗と閔妃は専制的権力を取り戻し、その権力保持の為に独立を捨て宗主国をロシアとし李朝時代に逆戻りした。



高宗と閔妃

話は戻るが、今もし米中が結託し、尖閣列島を中国に返せと要求すれば、「力の無い」日本は尖閣を手放さざるを得ない、この状況を自覚すべきである。「軍事力」というバックを持たない国の外交など、いざとなると全く無力で在ることを銘記すべきである。同盟というのも同等の軍事力あって成立するものである事も忘れてはならない。これが世界の現実なのだ。甘くないのである。戦前・戦中は、日本は剣豪の道を歩んだが、これからは剣聖の薫りを世界に醸し出し乍ら「触れなば切らん」の凜とした姿勢を明示すべきであろう。

話を戻す。政権を取り戻した閔妃の贅沢三昧の生活や恐妻の高宗の専横政治に対する不満は、民衆の怨嗟を呼び込んでいた。また閔妃と対立していた高宗の父、大院君も閔妃のロシア接近に国家の危機感を募らせ、同じく危機感と失望を感じていた三浦公使は「閔妃排除」で一致した。

1895年10月、大院君は日本の三浦梧楼公使の助けを借り、数十人の改革派有志と朝鮮兵士からなる暗殺団を景福王宮に送り込み、閔妃を暗殺した。民衆は万歳を叫んで歓呼したと「金ワンスブの親日派の為の弁明2」に記されている。この事件では日本人も含まれたため（訓練の時）、国際社会からは日本政府自体の関与が疑われた為、三浦公使以下日本人関係者を広島地裁で裁判にかけた。しかし李周海元将軍が責任を取って自首し、配下二人と共に死刑になった事と、現場に居た純宗（高宗の子供）が、朕が自撃せし「国母」の仇は「禹範善（うはんぜん）」（訓練隊責任者）なり、と証言し「禹（う）」もそれを認めた為に、三浦公使らは無罪となった。

韓国の中学教科書で主張している「日本公使が、日本軍と日本人のゴロツキを動員して殺害した」という歴史観は全く根拠がなく、真相には触れられてはいない。これで一時の危機は去った感があった。しかし高宗は大韓帝国が日本の保護国になり、自分の専制権力が失われる、近代化に我慢できず明治四十年ハーグ万国平和会議に密使を送り、密使は皇帝の委任状を見せ、日韓協約の不当性を訴える為に会議への出席を求めたが、日本の立場を理解する各国に相手にされなかった。日本は又も高宗に裏切られたのである。大韓帝国政府閣僚達も余りの身勝手な行動に怒りを感じ、閣僚全員が皇帝に退位を迫り、高宗はついに退位することになった。

両国は皇帝の権力を制限し、さらに近代化を図る為に1907年第三次日韓協約を締結して、内政の改革にも直接関与することになった。理由は、日本の援助にもかかわらず、政府高官の汚職、賄賂が横行し、人民は相変わらず飢えに苦しみ、近代化は遅々として進まなかったからである。

国内最大の政治団体「一進会」は、日本との一体化こそが国を救う道であると民衆に説いた。日露戦争では、大韓帝国が全く動かぬ中で、弾薬や糧秣の搬送、敵情視察など、一進会全員が日本軍に積極的に協力してくれた。

1909年(明治42年)に李容九は一進会百万人会員の名前で、全国民に訴える合邦声名書を発表、さらに皇帝に対する上奏文、曾禰荒助(そねあらすけ)統監、李完用首相に対し「日韓合邦」の請願書を提出した。李容九の朋友「宗」は皇帝の権限のすべてを日本国天皇にご委譲する「完全一体化」を主張した者もいた。このように日韓併合は日本が一方的に進めたのではなく、大韓帝国の中には日本との併合を推進した人々が多く居たのであった。

初代統監であった伊藤博文はもともと反対であり次の如く述べている。日本との併合は一時的にすべきで、韓国の進歩は大いに日本の望む所であり、国力発展せしむる為に自由な行動を取るべきであるが、只一つ条件がある。即ち韓国と日本は提携すべしで、日章旗と大極旗が並び立てば、日本は満足なり。日本は何を苦しんで韓国を亡ぼす必要があろうか。

自分は両国の「親睦厚くする」については自分の赤誠を貢献しようとしている。しかるに韓国は陰謀の他には日清・日露の両大戦の間、傍観したのみである。諸君は日本が、にわかに来たって韓国を亡ぼすならんと思うのは、果たして何に基づくか聞きたい。日本は韓国の陰謀を杜絶する為にのみ外交権を日本に譲れというた。しかし日本は韓国を合邦する必要はない。併合は、はなはだ金がかかり厄介だ。韓国は自治を要する。しかし今は日本の指導・監督がなければ健全な自

治は遂げ難い。これが今回の新協約を結んだ所以なのである...と。

伊藤の言葉は、当時の韓国の実状を明確に想像できる「言」ではある。伊藤が日本の意に反し、安重根にハルピンで暗殺されたことは、日本にとっては大きなショックであり、誤算であった。朝鮮の一進会の勢力拡大と相まって日韓併合への流れを最終的に決定づける事件になってしまったのである。



安重根

日韓併合は米国がハワイでやったように、現地の王政を打倒し抵抗するものを武力で弾圧して併合を強行したのとは全く逆な経過で成された。条約は1910年8月18日、内閣に上程され又皇族代表による御前会議で李容植（病欠）を除いて反対する者はなく、全員の賛成をもって併合が決定された。皇室は日本の皇室と同列に安堵され、各国も皆承認した世界でも稀な併合だった。

この様な歴史を韓国人は知っているのだろうか？
近代化は日本が基礎を作り上げたが、朝鮮の民族性は今も昔も変わってはいない。常に時代の「乱の火種」を作り出し続ける国である。精神異常者の多い国だからなのか？ 主権を奪うどころか、世界で初めて朝鮮の主権を世界に認めさせたのは日本であり、それを陰謀によって自ら主権を失った反省もない。そして自国の主権を守る為には、外国とは戦わなかった歴史を持つ朝鮮人に、近代史の中で日本が主権を奪ったと平然と教科書に書けるのは正に精神異常者の国、又

は米国の言う、火病の国と言えるのかも知れない。朝鮮半島の国は道義など通用しないことを、我が国は熟知し道義が通用する国に成る迄は、今後、つかず離れずで接すべきであろう。

平成29年年9月18日

志雲会代表 有馬正能